

個を鍛える学力づくり・授業づくり

自分の脳は自分で育てる、みんな育てる

組織局長 岡本 美穂

「運命」

あなたの運命はと聞かれたが

ぼくにはわからない

運命とは何だろう。

運命とは人に与えられた使命である。

人にはそれぞれ運命があるのだ

人の運命はわからない

あなたの運命もわからない。

それが運命なのだから。

詩が持っている力のすごさを最近感じています。詩を書くという実践には4つのポイントがあります。

①どの子どもも取り組むことができる。

「題名をつける」私が指導することは、これだけです。その後、学級通信などを使って良いと思うものをどんどん紹介していきます。短い詩であっても気にすることはありません。書くのが苦手な子どもにとっては、どのくらいの量を書かなければいけないのか・・・そこがまずは重要なポイントになってきます。

②優劣がわかりにくい。

作文だと、書かれている内容によって、子どもに優劣がある程度伝わってしまうのです。しかし、詩は短い文の集まりのため、子どもにはよくわかりません。比較はしますが、そこに優劣の感情は生まれにくいです。

③逆転現象がある。

短い言葉で伝えたい内容を入れるために、意外な作品が評価されることがあります。国語の授業でよく発言するとか、ノートがきれいとかいうような、賢いと子ども同士が思っている子どもとは違う子どもが、輝きだします。

④少しの時間で行える。

個人を鍛えるには、どこでその時間を確保するのか、どのような手だてを行うべき

なのかが問われます。そう考えていくと、

詩は子どもを伸ばす可能性であふれています。それを教えてくれたのが、最初に紹介した子どもたちの詩でした。これは、詩会社（詩を自主的に作るという係り）が何人かで考えて作り、朝の会で披露してくれました。この詩を作ったメンバー全員、勉強が得意とか、授業に前向きな子どもだったかというところ、そうではありません。このような取り組みを行っていくなかで自信をつけてきた結果の姿です。

◆自分の脳は自分で育てる、

みんな育てる

十月にJICAの取り組みでナイジェリア、ネパールなど7か国の文部科学大臣が私の学級に視察で来られました。その際、百マス計算の様子を見られるのが目的でしたが、最後にまとめておっしゃって下さったのは、学級の雰囲気良さでした。結局、一人の力を伸ばす取り組みであってもみんなが前向きにそこに取り組む姿勢というのは、集団だからこそできるものだと思います。

「今日ぼくは代議員になりたくて立候補し

ました。けどなれませんでした。正直めっちゃ悔しいです。けど、N君を支えたいです。花でいえば土の部分になりたいです。花でいえば、花はめっちゃ目立つけど、土はかげで支えてるといって感じで目立つし、すごい人の周りには絶対いると思うから、僕はその支える部分になりたいです。花を支える土になれ！」

子どもは集団の中でこそ育つ、という言葉思い出しました。学級が育つのが先か、子どもが育つのが先なのか、それは正直わかりません。しかし、一人一人の子どもを見て、その子どもの育ちを学級に位置づけ、みんなで喜び合える集団にしていく必要があるのです。このような作文もどんどん紹介し位置つけて意味づけしていきます。

今年度の私の学校の研究テーマは、「子どもたちの頭と心に言葉を持たせる国語の授業とは」

です。そして、講師は吉永幸司先生です。そこで、このような言葉を教えて下さいました。

「**子どもの言葉も教材となる。**」

国語の授業では、教材研究を行い、教師

の思いがあふれてくるものです。しかし、子どもの言葉をどう受け止めて、どう理解していくのかで変わるのだと改めて考えさせられたお言葉でした。

◆「書く」ことにごだわる

書くことで何が良いか。私は「一人の時間になるということだと考えています。学校では「みんなまで」何かをやることを求めています。しかし、みんながいる場であえて「一人にさせる」機会が必要です。一人の時間になることで

- ・自分自身で問いを持つことができる。
- ・自分の考えを表現することができる。
- ・自分の成長が見える。

これは子どもが伸びるサイクルです。

授業は、個人↓集団↓個人というサイクルで考えています。すると、最初の自分と授業後の自分が進化しているのか、自分で認識できることが大切なのです。子どもの書いたものを見て教師が価値づけ、意味づけしていくことが授業ではないでしょうか。自習の時間を振り返り、子どもが自主勉強ノートにこのように書いてきました。

「今日はみんな静かにできていたけど、ま

だちちょっとだけうるさかたです。でも、僕は成長したなあーと思いました。ちょっとだけR先生が来たけど、来なくてもできていました。よかったと思います。ほくはあんまりしゃべらなかつたです。

ほめほめ」

この子どもは、やんちゃな少年です。けど、自主的にその時間を振り返り、頑張った自分に満足して、最後は「ほめほめ」と赤字で書いている姿がとても可愛らしいなと思います。みんなは少ししゃべっていただけ、僕はすごく頑張ったし、頑張ることができた自分が満足だし・・・というのがガンガン伝わってきて、これを読みながら私は何だか泣きそうになりました。子どものひたむきさと可愛らしさに心動かされます。「僕はこんなに力がついたらよ」「前と後でこんなに賢くなったよ」「勉強が好きになったよ」と言える子どもにしてあげたいものです。そしてこんなことを素直に表現できる子どもは、エネルギーもあります。自己教育力は高まっています。子どもの言葉を受け止め、それを意味づけできる教室を目指していきたいものです。